



Title	日本における国際看護教育の役割
Author(s)	那須ダグバ, 潤子
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105769
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 那 須 ダ グ バ 潤 子 ）

論文題名

日本における国際看護教育の役割

論文内容の要旨

【背景・目的】

「日本の看護の特質や課題を明らかにすること」が研究者の一貫した研究テーマである。日本人看護師が自国の看護の特質と課題を検討する場合、他国と比較することは有効である。「国際看護」は看護師養成課程において1996年の指定規則改定以降、看護基礎教育に位置づけられたものの、その内容の多くは異文化理解や途上国支援に偏り、必ずしも日本の看護の特質・課題を考える方向には繋がっておらず、2011年以降の「大学におけるグローバル人材育成」推進により英語教育にさらなる重点が置かれてきた。結果として、日本の国際看護教育は「英語ができる看護師は海外へ」という意識を強めるとともに、「海外での活動」の捉え方も「看護の先進国へ行き先進的看護を学ぶ」と「途上国支援」という考え方を教える形となっているように思われる。一方、看護師のライセンスを持ち、海外で実際に働いている人たちにおける「国際的に看護を実践している理由」については報告が少ない状況にあり、その人達が日本の看護をどのように考えているかという報告についても少ない。

そこで本論文では、まず、日本と海外双方の医療現場を経験し、比較可能な視点をもつ日本人看護師に焦点を当て、「なぜ日本人看護師は海外で働こうとするのか、なぜそこで働き続けたいと考えるのか。自国の看護をどう考えるか」を明らかにすることを試みた。その結果考察を踏まえ、さらに日本とオーストラリアの看護師養成課程における「国際看護」の位置付けを文献的・歴史的に検討し、最終的に日本の看護の特質および構造的課題を再検討することを目的とした。

【日本と海外双方の医療現場を経験し、比較可能な視点をもつ日本人看護師に対する調査】

日本での看護師資格と実務経験を有し、かつオーストラリアで看護師登録を行って勤務した日本人看護師を対象に、半構造化面接を実施した。調査は2019年8月から2020年1月にかけてスノーボールサンプリング法により15名をリクルートし、対面またはオンラインで1時間程度のインタビューを行った。データは主題分析法により分析した。対象者の平均経験年数は、日本7.2年、オーストラリア9.2年であった。分析の結果、オーストラリアで働き続けたい理由として、①休暇が取得しやすく働き続けられる、②働く時間が明確で私生活との両立が可能、③努力が収入に反映される、④看護師としての立場が守られている、⑤キャリアアップの機会が豊富である、という5つのテーマが抽出された。

一方、「日本の看護は」という視点からの質問に対して、「患者の心を考える」「患者の状態をみて行動する」「経験を共有しながら看護する」「丁寧に看護をする」と捉え、「自分がケアを受けるなら日本がいい」と語ったことは注目される。これは他の先進国への看護師の国際移動研究の報告には現れておらず、日本の看護に対する深い信頼を示していると考ええる。この背景を考察すると、日本の看護実践が、長年にわたり日本社会で形成されてきたコミュニケーション様式や、儒教的倫理観に基づく他者への配慮、さらに日本の看護教育において重視されてきた自己省察といった教育的基盤に支えられ

ていることが挙げられる。多様性が前提となる移民国家オーストラリアにおいては、文化・宗教・言語の前提が共有されないため、非言語的な「察し」や「心を通わせる」コミュニケーションより、看護ケア技術の提供を重視した看護教育・臨床となっていると考えられる。これに対して日本社会は人種的・文化的に均質性の高い歴史を持つため、看護教育においても相手がどう「感じるか」を省察し、自身の提供したケアとともに態度の振り返りを重視している。

今回の調査では、英語が堪能であっても職場にうまく馴染めないと感じる状況も浮き彫りとなった。これは、日本の看護が前提としてきた「共有された価値観」や「関係性を基盤としたケア」が、異文化環境においては自明ではなく、必ずしもそのままでは通用しないことを示唆している。すなわち、日本人看護師がオーストラリアで直面した困難は、個人の適応能力の問題というよりも、日本の看護そのものがもつ前提が、異文化環境に移行した際に無条件では成立しないという構造的課題として理解する必要があると考える。すなわち、オーストラリアに国際移動した日本人看護師らが看護実践を行う上で、自国の看護をどのように位置づけ、再構築するかという課題が浮上したと考える。

【日本の看護教育とオーストラリアの看護教育における「国際看護」の位置付け】

戦後日本の看護教育・実践には、二つの流れ、すなわち途上国支援を担った看護リーダー達とアメリカへの留学を通じて近代看護を輸入した看護リーダー達の影響が認められた。日本の国際看護教育は、こうした歴史的経緯の上に形成され、「国際看護」が包含するとされる「異文化看護 (transcultural nursing)」についても、日本語訳の適切性と教育における意義に関する議論を欠いたまま現在に至っており、長らく臨床現場とは直結しない知識の教授として行われてきた。一方、オーストラリアの看護教育は、多様性を前提とした歴史認識と反省に基づき、移民国家としての文化理解と安全を教育の中核に据えている。看護基礎教育の内容自体は日本と大きく異ならないが、「多様性」「異文化」が生活実感として内在的に位置づけられている点に、日本の国際看護教育との本質的な違いがみられた。

以上から、日本における「国際看護」教育の本来の役割とは、日本の看護の良さを歴史的文脈のなかで適切に言語化しつつ、異文化との接触を通じてその価値を再構築できる専門職を育成することにあると考える。日本の看護の良さと強みを理解し、日本従来の倫理性と自己省察を基盤としつつ、多様性を前提とした世界の看護実践に参入できる力を育成する新たな教育デザインの核としての「国際看護」学・教育は、日本の看護が有する本質的価値と構造的課題を明らかにし、日本独自の看護の再設計につながるものと考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (那 須 ダ グ バ 潤 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	遠藤 誠之
	副 査	教授	神出 計
	副 査	教授	上野 高義
	副 査	名誉教授	大野 ゆう子

論文審査の結果の要旨

研究者は、日本の特質と課題を検討する場合、他国と比較することが重要であるという観点から、まず、日本と海外双方の医療現場を経験し、比較可能な視点をもつ日本人看護師に焦点を当て、「なぜ日本人看護師は海外で働こうとするのか、なぜそこで働き続けたいと考えるのか。自国の看護をどう考えるか」を明らかにすることを試みた。それを踏まえ、移民の少ない日本と移民国家であるオーストラリアの看護師養成課程における「国際看護」の位置付けを文献的・歴史的に検討し、最終的に日本の看護の特質および構造的課題を再検討することを目的としている。

【日本と海外双方の医療現場を経験し、比較可能な視点をもつ日本人看護師に対する調査】

日本での看護師資格と実務経験を有し、かつオーストラリアで看護師登録を行って勤務した日本人看護師を対象に、半構造化面接を実施した。調査は2019年8月から2020年1月にかけてスノーボールサンプリング法により15名をリクルートし、対面またはオンラインで1時間程度のインタビューを行った。データはテーマ分析法により分析した。対象者の平均経験年数は、日本7.2年、オーストラリア9.2年であった。分析の結果、オーストラリアで働き続けたい理由として、①休暇が取得しやすく働き続けられる、②働く時間が明確で私生活との両立が可能、③努力が収入に反映される、④看護師としての立場が守られている、⑤キャリアアップの機会が豊富である、という5つのテーマが抽出された。

一方、「日本の看護は」という視点からの質問に対して、「患者の心を考える」「患者の状態をみて行動する」「経験を共有しながら看護する」「丁寧に看護をする」と捉え、「自分がケアを受けるなら日本がいい」と語ったことは注目される。これは他の先進国への看護師の国際移動研究の報告には現れておらず、日本の看護に対する深い信頼を示していると考えられる。この背景を考察すると、日本の看護実践が、長年にわたり日本社会で形成されてきたコミュニケーション様式や、儒教的倫理観に基づく他者への配慮、さらに日本の看護教育において重視されてきた自己省察といった教育的基盤に支えられていることが挙げられる。多様性が前提となる移民国家オーストラリアにおいては、文化・宗教・言語の前提が共有されないため、非言語的な「察し」や「心を通わせる」コミュニケーションより、看護ケア技術の提供を重視した看護教育・臨床となっていると考えられる。これに対して日本社会は人種的・文化的に均質性の高い歴史を持ったため、看護教育においても相手がどう「感じるか」を省察し、自身の提供したケアとともに態度の振り返りを重視している。

また、本結果では、英語が堪能であっても職場にうまく馴染めないと感じる状況も浮き彫りとなった。これは、日本の看護が前提としてきた「共有された価値観」や「関係性を基盤としたケア」が、移民社会においては自明ではなく、必ずしもそのままでは通用しないことを示唆している。すなわち、日

本人看護師がオーストラリアで直面した困難は、個人の適応能力の問題というよりも、日本の看護そのものがもつ前提が、移民社会の環境に移行した際に無条件では成立しないという構造的課題であり、国際移動した日本人看護師らが看護実践を行う上で、自国の看護をどのように位置づけ、再構築するかという課題が浮上したと考える。

【日本の看護教育とオーストラリアの看護教育における「国際看護」の位置付け】

日本の看護教育における国際看護は、戦後日本の看護教育・実践には、二つの流れ、すなわち途上国支援を担った看護リーダー達とアメリカへの留学を通じて近代看護を輸入した看護リーダー達の影響が認められる。一方、オーストラリアの看護教育は、多様性を前提とした歴史認識と反省に基づき、移民国家としての文化理解と安全を教育の中核に据えている。看護基礎教育の内容自体は日本と大きく異ならないが、「多様性」「異文化」が生活実感として内在的に位置づけられている点に、日本の国際看護教育との本質的な違いがみられた。

以上から、日本における「国際看護」教育の本来の役割とは、日本の看護の良さを歴史的文脈のなかで適切に言語化しつつ、異文化との接触を通じてその価値を再構築できる専門職を育成することにあると考える。日本の看護の良さと強みを理解し、日本従来 of 倫理性と自己省察を基盤としつつ、多様性を前提とした世界の看護実践に参入できる力を育成する新たな教育デザインの核としての「国際看護」学・教育は、日本の看護が有する本質的価値と構造的課題を明らかにし、日本独自の看護の再設計につながるものと考ええる。

以上のように本研究は、「日本の看護の特質と構造的課題を明らかにする」という一貫した問題意識のもと、日本と海外双方の医療現場を経験した日本人看護師の語りを質的に分析し、さらに日本とオーストラリアの看護教育における「国際看護」の位置付けを歴史的・文献的に検討することで、日本の看護および国際看護教育の再検討の方向性を示した意欲的な研究である。今後、本研究成果が国際看護教育の再設計や、日本独自の看護教育モデルの構築へと発展していくことが期待される。

従って、博士（看護学）の学位授与に値するものと判断する。